

記念誌「相中相高八十年」より
(大正期 その1)

1 歴史の流れ

明治末、思想に関する取締り強化の傾向がしだいに厳しくなっていた。戊申詔書、新聞紙法、特高警察設置などにそれをうかがうことができるが、大正期には、いわゆる大正デモクラシーとぶつかりながら、明治以来の思想取締りの傾向が継続されて行くのである。

大正期は、第一次憲政擁護運動から始まる。……

1914 (大正3) 年、第一次世界大戦^(註1)がおこる。これは行きづまりつつあった日本経済に大きな救いとなった。大変な戦争景気をもたらした。また、日本は日英同盟を理由に参戦し、欧米勢力の留守に乗じて中国大陸進出をはかる(21カ条要求)のである。…しかし、日本の景気のよさはそのまま国民全体の利益につながったわけではなく、経済面における好景気は飢餓輸出によるもので、労働賃金の上昇にそのままつながらず、物価だけは高騰するような状況をもたらしたから、庶民の生活苦は解消されず、社会不安-大正デモクラシー運動の高まる素地はなくならなかった。

……

さて、第一次大戦当時から政府が気にし始めた事が一つある。それは、1917 (大正6) 年ロシアにおける革命の成功である。日本政府はこれに対して大きな危機感をいだき、国内における大正デモクラシーの運動についてもこれとの関連から大いに対処に苦慮することになったのである。

…… 第一次大戦のあと、国際的には協調外交が展開され、平和への趨勢にあったが、日本国内では暗い事件が続いている。財政破綻 - 疑獄事件 - 宮中某大事件 - 原首相暗殺 - 関東大震災・虐殺事件 - 虎の門事件という具合である。……

1925 (大正14) 年、護憲運動の眼目であった普通選挙法案がついに両院を通過し成立した。これはいわゆる大正デモクラシーの目指した目標の一つであった。しかし、この時同時に治安維持法が成立するのである。これは、ロシア革命の日本への波及を恐れる風潮から、あまり反対もされずに決まるのであるが、後に思想に対する大きな締めつけとなる決定的な一撃であった。

……

大正期の日本を概観すると、資本主義の発達 - 不況 - 大正デモクラシーという一つの基本的な流れがあり、それを日本政府は、大陸進出 - 大正デモクラシーの制圧によって切りぬけようとしたといえる。したがって、教育の方向もそれに沿った形で展開されることになる。

(註1) 1914 (大正3) 年~1918 (大正7) 年 戦場: ヨーロッパ、中東、アフリカ、中国等

約7千万の戦闘員が参加 死者数だけでも戦闘員900万人以上、非戦闘員700万人以上といわれる。

連合国側: フランス共和国、イギリス帝国、ロシア帝国、セルビア王国、モンテネグロ王国、ベルギー、イタリア

王国、ポルトガル共和国、ギリシャ王国、アメリカ合衆国、大日本帝国、他多数

中央同盟国側: ドイツ帝国、オーストリア-ハンガリー帝国、オスマン帝国、ブルガリア帝国、他 (Wikipedia 等)

(参考) スペイン風邪 約5億人感染 約5千万人死亡 といわれる。

1918年~1920年、第一次世界大戦中であり、参戦国では、軍の士気維持のためこの報道はおさえられた。

中立国であったスペインからは報道されたため、この名称になった。スペインが発祥ではない。

歴史はこうしてつくられてしまうという典型である。人間の本质はいつの時代も変わらない。

(9月1日 転記&文責 村山)